
太陽と愛と

川村 晃

冬樹社

太陽と愛と

初版発行

一九六四年六月五日

著者との話し合いにより検印省略

定価五二〇円

著者◎ 川村 晃

発行者 瀧 泰三

発行所 冬樹社

東京都新宿区四谷4の30
電話代表(三三三)八五八五
振替口座東京七七五七七番

印刷所 三容堂印刷株式会社
製本所 若林製本株式会社

太陽と愛と——もくじ

| | |
|--------------------------|-----|
| 鹿兒島空港にて | 7 |
| 奄美への飛行 | 21 |
| 一つの過去 | 52 |
| 蘇鉄 <small>そてつ</small> の島 | 72 |
| 毒蛇の目 | 109 |
| 幸福 | 147 |
| もう一つの幸福 | 183 |

| | |
|-------------------------|-----|
| 人間と自然 | 189 |
| さいはて | 211 |
| 禁忌 <small>きんぎ</small> | 231 |
| 鉛色の空 | 235 |
| 流人 <small>りゅうじん</small> | 266 |
| 死んだ少女 | 274 |
| 神戸港の朝 | 295 |

装幀
福田龍生

太陽と愛と

鹿兒島空港にて

双発のプロペラ機は、まるで国際線の四発のジェット機のそれのような、はちきれそうな胴体と巨大な垂直尾翼を見せて、私たちを待ちうけていた。薄曇りの日で、右手に大きくせまっている桜島は、ほそいひとすじの白い噴煙を火口の片隅からおだやかにくゆらせ、そのいかめしい姿を夕暮れを思わせる淡い紫にけむらせていたが、飛行機は雲をとおしてそそぐ南国の太陽の光をうけて豊かに銀色にかがやき、そこにはまちがいなく時刻どおりの白昼があった。私は困惑して苦笑した。私たちが鹿兒島についたのは昨日の午後七時すぎで、町はクリスマス・イブで明るんでいたが、桜島はすでにそのときには黒々とした夜の底に眠っていた。そして、城山のホテルに泊って迎えた今日は、朝からこの薄曇り。西郷隆盛の自刃の地、鹿兒島の人たちにとっては聖地となつている城山に奄美出身者が建てたそのホテルは、また、桜島に接するための絶好の展望台にもなつていたのだが――。これでは男性的な景観といわれている桜島の威容を見ないままで私は鹿兒島と別れることになる。どうしても男性的な桜島を見たい、というのではなかったが、やはり、このことにはこころが残つてならなかった。それに、私はそれほどひどいものとは思わないが高所恐怖症になつていて飛行機が嫌いなのだ。つまり、そうあつてほしい桜島に白昼が

なく、淡く紫色にけむっている中性的な桜島しか見ることのできなかつた私を乗せて飛び去ろうとしていた嫌いな飛行機のほうには白昼がある。そういうことが私の苦笑をさそつたのである。

「あれに乗れば一時間で奄美につくのね、船なら十何時間かかるというのに。飛行機と船では料金がずいぶんちがつて損したみたいだけど、そのことを考えればあきらめもつくわ」

はきなれないハイヒールの足もとをおぼつかなくせかせかとはこんでいた妻の千枝子が、これほどことなく板につかない青いモヘアのコートの肩を私に寄せ、いつもとちがつてやや甲高くなつた声で言つた。

「それはそうだよ、もつたいたいことはもつたいたいけど、おまえだけが船にするってわけにもいかないしね」

私は振りむかずに歩きつづけたが、手はひとりで千枝子の肩を軽く抱いていた。瘦せこけた肩であつた。

「私はやはりついてこなければよかつたのかしら？」

「そうとも言えるし、そうでないとも言えるね」

「あなたは深井さんの招待、私は自分もち。ほんとに、あなたの言うとおりでわ。もつたいたいわ。私たちにしてみれば、私のこの自分もちつてのはたいへんな大金よ。それだけあれば——」

「子供になにか買ってやれるつてのかね」私は肩にまわした手に思わず力を入れていた。

すると千枝子はその手に反抗した。彼女の体がふいに重くなつた。立ちどまろうとしているのである。

「歩けよ」

「いや、私はここから帰ります」

「ひとりですか？ おまえがひとりでなにかできるようだったら、おれは苦勞がないよ。それもおれの苦勞は道楽だったのか？ 子供たちにいためつけられるのも、身軽になつて好きな博打ばかりやつておとつあんに慰謝料を寄せせなんて言われるのも、おれの道楽かね？ 道楽つて言えばおまえもたいした道楽者だよ。自分が産んだ子供でもないのに大事にかかえこんで、肝心のおれのほうはちつとも大事にしない」

「またそれを言う。そういやみだけは言わないでよ、おねがいだから」

私は千枝子の力に押しきられて足をとめ、彼女の顔をのぞきこんだ。彼女は、握げ手のついていない和装用の象牙色の革のバッグを指輪のない手で抱きしめ、私の両腕のかこみの奥から、眉のつけねに縦皺をつくり、かなしげな、また、いかにもうらみがましい目つきで私を見つめ返した。

「ごめん」

私は片手をはなして胸の前に立て、彼女の肩口に残したもういっぽうの手には逃げられぬように力をこめて彼女を捍んだ。微笑を浮かべていたにちがいないが、けっしてふまじめな気持でそうしたわけではなかった。眉のつけねの縦皺とうらみがましい目の色は、ともすると自分からまねきよせてしまうのだが、私にとっては苦手中の苦手だった。それを見ていると生きるのがいやになつてくることしばしばである。私はかつては無神論者だったが、ちかごろではそれが公

言できないようになっていた。千枝子を拜むのも、ほんとうは、そういう私の姿をどこかで眺めているとも思える神仏のようなものに救いをもとめてのことかもしれない。か

「もう言わないわね」

「言いません」自信はなかったが私はそう答えないわけにはいかなかった。

「今度言ったら、ひっぱたくよ」

私ははっとした。千枝子が「ひっぱたくよ」などと乱暴な言葉をつかうのは機嫌がなおりかけている証拠なのであった。

案の定、すぐに縦皺が消え、目もとが明るんできた。私たちはまた歩きだした。

ところで、こんなごたごたをおこしてはいたが、私たちは別にとりのこされていたのではなかった。ほかに幾組となく立ちどまって、お辞儀をし合ったり、談笑し合ったりしていたのである。

私を故郷の奄美諸島めぐりに招待してくれた深井秀子女史もそのなかに入っていた。彼女は黒っぽい大島紬の羽織につつんだ小さな体を二つに折って、しきりにお辞儀をしていた。逆毛を立ててふくらませたセミ・ショート、白いものまじりはじめている頭髮が、そのつど平らになった背中のむこうに隠れて消える深いお辞儀の連続で、手にしている茶金の地に焦茶の縦縞を編みこんだレース編みのバッグも、そのつど揺られて、子供のような体の横に出たり入ったりしていた。

相手は色黒の、がっしりした体格の男だったが、その顔は童顔で、深井さんのお辞儀に愛想よ

く応じつづけていた。そしてそのたびに禿げている頭のとっぺんが光った。深井さんと同年輩である。誰だろう？ 深井さんの小学校時代の同級生といったところだろうか。身なりがよかつた。渋い藤原色の上等の背広、やや若向きの肌色のまさつたネクタイ、靴も新品の上等だつた。私はその男の正体をあれこれとおしはかつたが、へ土地の有力者」ということ以上には想像をひろげることができなかった。

私たちは二人からやややはなれたところに立って談笑がすむのを待った。深井さんは三年ぶりの帰省であつた。相手が土地の有力者であれば話が長くなるのはあたりまえのことなのだ。

「わつたり談合、なかなかおわらない」

「なにそれ？」

「二人の話し合はずいぶん長いってことさ」

「わつたち談合——」千枝子が真似しようとして、とちつた。彼女は舌が長すぎるのか短かすぎるのか、それともほかに原因があるのか、ふだんでもときおりとちる。耳ざわりでないアルトに近い声で彼女がそれをやると、私はたのしくてたまらなくなる。

「わつたちでなくて、わつたりだよ」私は笑いを押えながら言った。「わつたり談合しゆて、名瀬から、ひん逃げろや加那し」

「あんた、まさか気がちがつたんじゃないでしようね」

「冗談じゃないよ、これは奄美にある古い歌、奄美の古歌なんだよ。こつちへくるまでに、おれ、ちよつぱり勉強しておいたんだ」

「どういう意味？」

「二人で相談して名瀬へ駆落ちしよう、恋人よ、という意味なんだな。まるでいまのおれたちみたいじゃないか」

「十日たったら、東京へ帰っているんだから、駆落ちではないけど」千枝子はちょっとしなをつくり、たばねてぐるぐる無造作に巻き上げた夜会巻きに似た髪型の頭をこころもち傾けて、なまめかしく微笑した。機嫌は完全になおったようだった。「これが六年間もおあずけになっていた新婚旅行なのよ。だから、私たち、喧嘩なんかしないで、すこしでも、いい思い出が残せるように——」

「そうだよ、そのとおりだよ」

「でも、それがねえ」千枝子が、つと、体を寄せ、私の上着の裾を、きつく、すがりつくようにしてつかんだ。機嫌がなおってよかった、と思っていた私は、びっくりして彼女を見つめなおした。それは千枝子がなにかに恐怖していることをしめしていたのだ。二人で人通りのたえた夜道を歩くときや、ふいにこわい思いをしたときそこに私が居合わせれば彼女はいつもそのようにした。

「どうしたんだ？」

「この飛行機、プロペラが二つでしょ、一つ故障したら、きっと、もうおしまいよ。四つついていて、そのうちのひとつのならないけど、これではこわいな。なんだか私、胸がどきどきして

——」

東京とはちがって鹿児島がクリスマスの日とは思えないほどの暖かさだったためか、青ざめて
いるはずの千枝子の頬は、逆に、なにか興奮でもしているように赤く色づいていたが、彼女の恐
怖が身ぶりや言葉だけのものではないことを証明するあらたなしるしを、私は見た。目はまばた
きをとめ、瞳孔がややひらいたような感じになり、小さな鼻の頭には、心臓の苦しさをしめす汗
のつぶがびっしり吹き出していた。

「こわがることはないよ。飛行機の事故ってのは、おれば全員死亡で一巻のおわりだけど、そ
うめったにあるものではないんだから。それにね、飛行機の事故はね、ほとんど、離着陸のとき
におこるんだよ。飛んでいるときはまず心配はいらないんだ。つまりエンジンが二つか四つか、
そういうことはあまり事故とは関係がないのさ」

高所恐怖症で飛行機ぎらいの私が飛行機の推薦人になった。

「そうなの、それなら安心していいのね」

「しっかりしてくれよ、親分。飛行機をこわがっていたのは、ほんとは、おれのほうだったんだ
ぜ」

「そうだったわね。あなたのことを、いくじなした、と言って笑ったのは、いったいどこのどい
つだ？」

「ここにいるこいつだ」

「でも」千枝子はまたこころぼそげに言った。縦皺をつくるのではなくて、いかにもなさげなさ
そうなの、しかめつらを見せていた。「ハブはどうする？　なんだか、こわいなあ」

「町のなかにはいないんだよ」私は微笑しながら言った。

「ほんとかしら？」

「ほんとき。山のなかへ入ったって、よっぽどの山奥でなければ見たくても見れないんだ」

「そうなの」

「そうさ。そうじゃなけりゃ、おれだってきやしないよ」

千枝子は大の蛇嫌いだ。少女時代に蛇に追いかけられたことがきっかけでそうなったという。だが、私の言葉で千枝子は安心したようだった。私は千枝子の目が生き生きとしてきたのを見とどけた。上着の裾から彼女の手がはなれた。その手が黒い兔の毛の飾りのついたコートのポケットに移り、水玉模様の手カチをつまみ出し、思わず微笑してしまった私の前で、鼻の頭の汗をぬぐった。「そうだ、それでいいんだよ。あんたは年上らしく落着いて、でんと、いつでも構えていなければいけないだよ——。なんだったら、深井さんみたいに薬を飲んでおいたらどう？」

深井さんは乗物に弱く、鹿児島へくるまでの特急へはやぶさの車中でも何錠か、この空港へくる自動車のなかでも一錠、乗物酔い防止の薬を服用していた。それにならって、おまえは心臓の薬と精神安定剤を飲んでおいたらどうか、と私は言ったのである。それらの薬は常備薬として千枝子の象牙色の革のバッグにいつでも入れてある。

「申しわけない、見かけ倒しの年上女房で。でも、もう大丈夫。薬はいらないわ。それとも、大丈夫とわかっているのに薬を飲んで、胃をこわす？ つまらないじゃないの、そんなこと」